

より高く、より遠くまで

日本海軍が巨費を投じ最新技術を駆使した長波送信施設

足りない、足りない

一八八六(明治十九)年、勅令(天皇の命令)により、佐世保に軍港を設置することが決まりました。これを機に人口四千人余りの村だった佐世保は人口が急増。軍人、役人、商人などが大勢押し寄せるようになりました。

一八八七(明治二〇)年から一九二三(大正十二)年まで三十六年間の人口を平均すると、一年間に約四百七十戸の家が増え、約三千二百人が移り住んできたことになり、毎年村が一つずつ増えるような勢いだったといわれています。

狭くて平地が少ない佐世保の中心部に、家と人がひしめき、そこにまた次々と人が入ってくる。人々はすくに入りきれなくなり、外へ外へと居住地を広げていきました。

人口流入が最も激しかったのは、日清戦争から日露戦争(一八九四―一九〇五年)の十年余りで、この間に増加したのは約六万人。一年間に一万二千人がやって来た年もあり、すべての面で混雑と混乱を極めました。

激しい人口の増加に必要な物資、商品の供給が追いつかず、すべてが「足りない、足りない」の状況でした。したがって物価も高く、多くの軍艦が入港すると、価格が一気に何割も上がる「艦隊相場」「水兵相場」が市民や兵士たちを悩ませていました。また貸家、貸間の数が不足して家賃が高く、市外から来る人たちの大きな負担になっていました。

船橋、鳳山、佐世保

佐世保が激動の時代にあったころ、日露戦争(一九〇四―〇五年)で無線通信の重要性を認識した旧日本海軍は、一九一〇(明治四三)年、日本周辺の通信網を整備するため、千葉、台湾、佐世保の三力所への無線局建設を計画しました。

一九一五(大正四)年に「船橋無線電信所(千葉県船橋市)」が完成し、次いで一九一九年に「鳳山無線電信所(台湾高雄県)」が完成。そして最後に、四年の歳月と百五十五万円(現在の金額で約二百五十億円)という莫大な費用を費

やし、「佐世保無線電信所(針尾送信所)」が二年に完成しました。三本ある無線塔は約300mの間隔で正三角形に並んでおり、その中心部に通信局舎が設置されています。

長波と巨大なアンテナ

天を切り裂くほどの巨塔。針尾の地に姿を現した136mもの巨塔を見た人たちは、きつと驚いたに違いありません。その大きさは遠くからでも確認できますが、近くから見上げると、遠近感がさらに強調され、けた外れに大きいことが実感できます。

このように巨大になったのは、当時、遠距離無線通信には「長波」が適していると考えられていたため。長波は強力な電波で、長いアンテナから発信しなければ遠くまで届きませんでした。そのため、日本海軍はこれほどの施設を建設したので。

ちなみに十三階建ての佐世保市役所の高さは59m、ハウステンボスのドムートルンは105m。針尾の無線塔は今も圧倒的な存在感を誇っています。



ニイタカヤマノボレ?

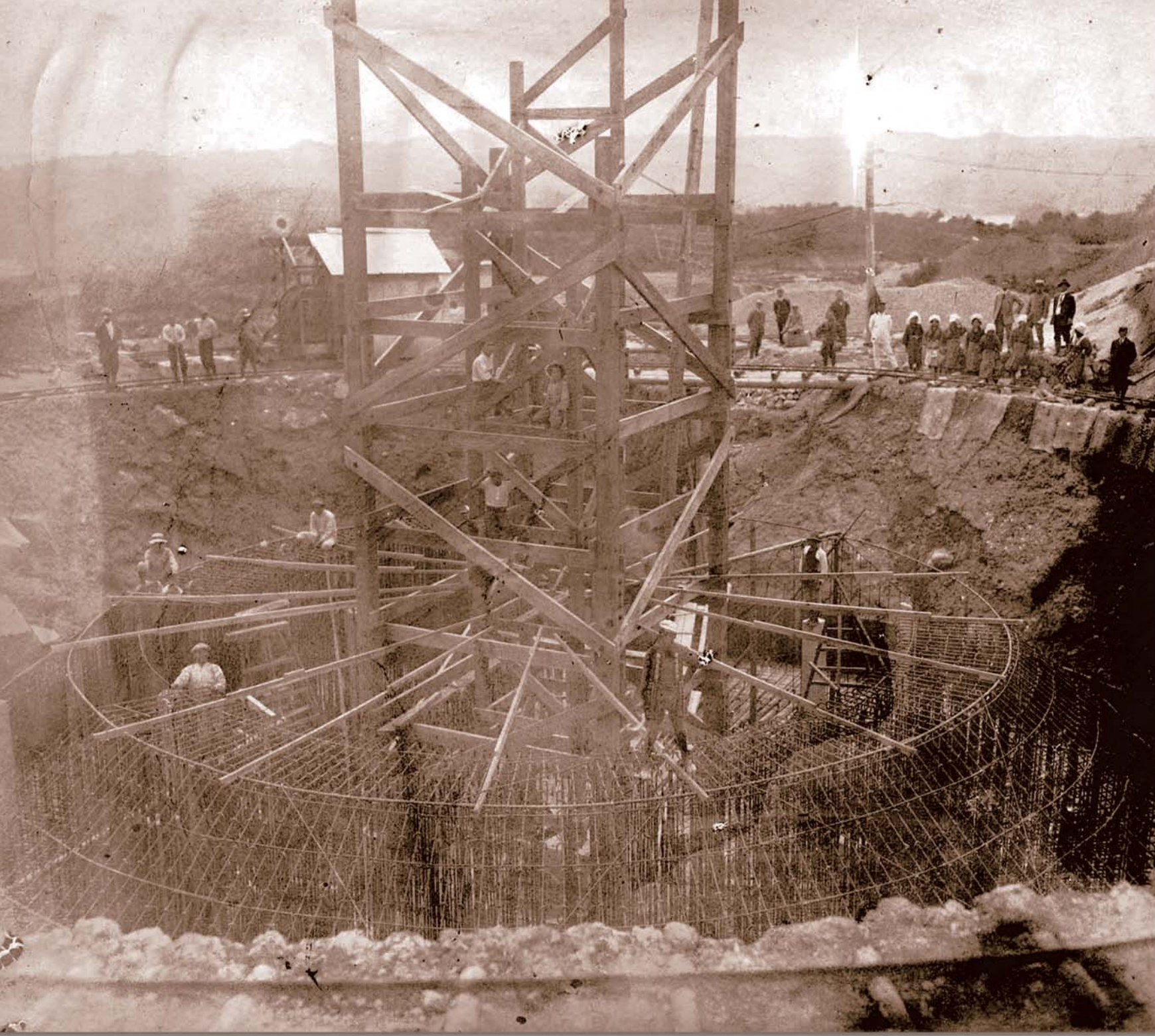
当時の最新技術を駆使して建設された針尾送信所は、日本海軍の重要な施設として、主に中国大陸、東南アジア、南太平洋方面に展開する海軍部隊、特に艦隊との通信に使用されました。針尾送信所という、太平洋戦争の開戦を告げる暗号「ニイタカヤマノボレ一二〇八」を発信したという話がよく伝えられていますが、これにはさまざまな説があります。防衛省防衛研究所によると、「まず瀬戸内海に停泊中の連合艦隊旗艦・長門が暗号文を打電。呉通信隊を経由し、船橋送信所が真珠湾攻撃の部隊へ発信した。同じ仕組みで針尾送信所が中国大陸や南太平洋の部隊へ発信したと考えられる」としていますが、針尾から送信したという確かな資料は残されていません。

現存する最後の施設

一九三五(昭和一〇)年ころになると、遠距離通信には「短波」が適していることが分かり、長波通信は次第に補助的に使用されるようになりました。針尾の無線塔も同様で、戦争末期には食料倉庫として使われることもありました。

戦後、針尾送信所は海上保安庁の所管となり、海上自衛隊と共同で使用されていましたが、九六(平成八)年、後継の無線施設が完成したことに伴い、本来の役割を終えることになりました。

針尾送信所などの長波送信施設は、一九二〇年前後の短い期間に集中して建設されました。しかし、現在そのほとんどは撤去されており、針尾送信所は、無線塔、通信局舎の両方ともに現存する国内最後の施設になっています。



基礎部分の配筋作業風景

従来から伝えられているように、岩盤を掘削して基礎を築いていることがよく分かります。基礎の深さは約6m、直径は約24mであることがボーリング調査で確認されました。写真中央には太い木材でタワーが組まれ、この中に作業用の昇降機などが設置されたといわれています。タワーの背後に写っている小屋の中にはコンクリートミキサーのような機械が据えられているのが見えます。

※吉田直紀氏(清水建設)から提供された写真には表題部に●印を付けています。